

## 空手道詳説（35）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

##### （1）沖縄の言語

##### オ 琉球方言の母音変化と日本語との類似性

前項の琉球方言区分のところで述べた沖縄島中央の「沖縄方言」には、王府のあった首里を中心として使われた「首里方言」があって、一応は中央語として存在したが、大衆同士の共通語としては「那覇方言」が使われた。その理由は、後のキの項「首里方言の発生とその後」で述べる。

地域ごとの方言差は、本土の場合より大きかったといわれている。近距離であっても首里方言と那覇方言がある訳で、両者の間は役割上の違いであるが、その他の地域では、尚真王時代に中央集権政治が確立されたといっても、島々なら隔離性であり、沖縄本島の場合なら、伝統的な社会構造上の壁から抜け出せない地区が多かったのではと推察される。

このような事情から、多用性の大きい琉球方言全体を論ずるのは極めて難しいため、ここでは「那覇方言」を中心に述べてみたい。

那覇方言を仮名書きし、母音、子音を少々置き換えるだけで意味が通じる言葉は思いのほか多い。事例として、次の日本語を沖縄では何と呼ぶか示せば、

雨→アミ、舟→フニ、雲→クム、灰→フェー、前→メー、遊び→アシビ、酒→サキー、犬→イン、女（おなご）→イナグ、煙→キブシ、魚→ウユ、昆布→クープ、薬→クスイ、強情→ガーヂュー、蕎麦→スバ、昨日→チヌー、兄弟→チョーデー、鍋→ナビ、両親（双親）→フタウヤ、一つ（最初の hi を除き）→ティーチ、二つ（最初の hu を除き）→ターチ、三つ→ミーチ、水→ミジ、前→メー、厄介→ヤッケー、夜→ユル、童→ワラビ、鯉節→カチューブシ、薬→クスイ、炒める（炒る）→イリチー、古里（生れしま）→ウ

マリジマ（「シマ」は島ではなく、特定の区域をさす）、大根→デーク（「でーこん」は関東以北で今も使われる）、などなどである。

これらの言葉を聴けば、大いに興味をそそられるばかりか、かつて標準語でない土地の方言に馴染んで育った経験を持つ者にとって、懐かしい響きを禁じえないと思う。日本各地の方言も、それぞれが固有の音韻変化をもって固定化したケースが大部分だからと言える。

琉球語の場合、大野晋、柴田武編「岩波講座 日本語 11 方言」（岩波書店、1977年）の176-177頁に次の表がある。（筆者は、この書籍を閲覧できなかったため、ウィキペディア、「琉球語」の「日本語との対応関係」から引用）

[日本語と琉球諸語の母音の対応関係]

日本語	奄美方言	宮古八重山方言	与那国方言
あ a	あ a	あ a	あ a
え e	いう i	い i	い i
お o	う u	う u	う u
い i	い i	いう i	い i
う u	う u	う u	う u

日本語	奄美方言	沖縄方言	宮古八重山方言	八重山方言	与那国方言
あい a i	ë、e	e	a i、a i	a i	a i
あえ a e	ë、e	e	a i	a i	a i
あお a o	o	o、a u	o、a u	o、a u	a u
あう a u	o	o	o	a u	u
おえ o e	i、ë	i、e	u i	u i	u i

（上表の「沖縄方言」は、「那覇方言」を指す）

以上のことから、琉球語では日本語のオ段母音が u に、エ段母音が i に対応しているため、ほとんどの行で、日本語のオ段とウ段、エ段とイ段は統合している。ただカ行イ段のキは、一部地域を除き ci (チ) に変化を起こしている。また、タ行・サ行ではウ段がイ段に統合しているので、日本語のスは si となってシ・セと統合し、日本語のツは ci となってチと統合している（テは ti となるためチと区別がある）。これらの行ではオ段のソは su に、トは tu となっても、スとツの区別は残っている。

したがって、話し言葉が即座には理解できなくとも、語彙の音韻変化を念頭に置き、仮名書きにしてもらえば分かりそうな例が次である。

イーカンゲー→良い考え、イッペー→一杯、ウートゥ→夫、サキヌマー→酒飲み、シチョール→知り合い、タシカカー→本当か（確かか）、シンケンカー→まじかよ（真剣か）、アワティ→急ぐ（慌てる）、カメー→食べなさい（噛め）、シランチュー→知らない人、フゼーネーラン→風情がないな、ヤムン→痛む（病む）、マサカヤー→本当かよ（まさか）、テーゲー→適当（大概）、シッタカー→知ったかぶり、などである。

だが、タンメー（祖父、おじいさん）、メンソーレ（いらっしゃい）、ニーシェ（青年）、チューガナビラ（こんにちは）、チャービタン→参りました、ハゴー（汚い。もしかしたら「ばっちい」）、ティーラ（太陽）のように、標準語にはつながらないが、日本古語からの変化でないかと思われる言葉も沢山ある。明瞭なのは、アーケーズは蜻蛉（とんぼ）のことで、古語で蜻蛉は「アケ」（日本の古名・秋津島の「あきつ」は蜻蛉のこと）であった。

日本古語や方言との関わりは、必ずしも九州方言だけが多い訳ではない。全国の何処かの方言に存在する場合も多数存在する。

驚いたことに、

- ・ コージは「黴」のことで、麴から出た言葉。
- ・ シシは「肉」で、日本古語でもシシは肉。
- ・ マチャは「店」で、かつて城下町などで商家や職人の家を「町屋」呼び、対して「仕舞た屋」（商売をしていない普通の家）がある。この言葉は、薩摩支配後に入ったのかもしれない。
- ・ ヤナーは嫌い「悪い」とか「嫌い」の意味で、「嫌だ」から出ている。
- ・ トウジは「妻」をいい、日本古代の妻問婚が一般的だった時代の女性家主を指す「刀自」（とじ）から出た言葉、対して男性の場合は刀禰（とね）となり、この二つは今でも神道で使われている。
- ・ リンチは「嫉妬」や「やきもち」で、倅気から出た言葉であり、男女間のやきもちをいう。
- ・ ワタは「腹」のことであるが、日本語でワタは臓物のこと。主に大腸や小腸を指すが、腹腔内臓の全体も言う。

- ・御殿（ウドゥン）は元来王族や按司の邸宅で、この「ドゥン」は、西郷どん（鹿児島弁で西郷殿）に同じだが、山形県尾花沢市に「古殿」という集落があって、「フドゥン」と読む。

琉球語の発生時期推定とも関連するが、子音では日本語のハ行が琉球の多くの地域で p 又は  $\phi$ （国際表音記号での一つで、ローソクの火を吹き消したり、粥を吹いて冷ます時に出る音）になっているという。日本本土では、ハ行は奈良時代以前は p、平安時代から室町時代までは  $\phi$  であったという研究から、琉球では古い発音を残していると考えられる。（この部分、ウィキペディア「琉球語」の「日本語との対応関係」を参考にした）

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行